



## T君の笑顔 胸に刻み

福岡いのちの電話理事

長谷川 彰

(西日本新聞社編集局生活特報部長)



唐突にかかってきた電話の声に、耳を疑ったことを思い出す。「おい、お盆にTの精霊船が出るから、みんなが集まろう」「はあ？ どういうこと？」「実はTが自殺していたんだ」一。30数年前、私がまだ大学生だった夏の出来事だ。

高校の同級生だったT君。故郷から遠く離れた県の大学に進んでいた。その地で自ら命を絶ったというではないか。ムードメーカー的な存在で、クラスで湧き起こる笑い声の中心に、いつも彼がいた。自殺という行動には最も縁遠い人といった印象しかなく、級友一同、言葉を失った。

彼の死は、ごく近しい人にしか伝えられていなかったようだ。お葬式に参列できなかったことを無念に思った仲間が、みんなに招集をかけたのだった。なぜ、彼は…。誰もが素朴な疑問を口にしたが、「そんなに悩みがあるようには見えなかった」「発作的に」といった、また聞きのような説明ばかりで、納得できる理由が語られることはなかった。ご両親にお尋ねできるはずもなく、身内の方々も解けぬ謎の前で、なお戸惑いの中におられた。

「みなさん、兄のためにありがとう」。浴衣姿の妹さんが、T君の好きだった音楽を奏でるテープレコーダーを抱き締めながら精霊船に付き従う姿に、涙をこらえ

切れなかった。

縁あって一昨秋、福岡いのちの電話の理事を仰せつかった。さまざまな悩みや不安、危機に直面して生きる力を失いかけているような人々に、電話で話し相手になり、その一助となるボランティア活動に関わるに当たり、あらためて自殺問題を身近に感じた初めての経験は何だったろうかと振り返り、T君の記憶がよみがえったのだ。

年間自殺者3万人時代と呼ばれて久しかった社会状況にも変化が表れ、昨年の自殺者数は2万5,427人で5年連続の減少となった。内閣府の担当者は、国の自殺対策が地域でも浸透し、医療の苦痛緩和ケアが進んだことなどが要因と分析している。ただ、なお万単位の人が無念の死を遂げている事実が変わりはない。その一人一人の周囲に、なぜ？ なぜ？ と独りごちるたくさん家族や友がいることも忘れてはならない現実だ。

自身の新聞記者としての仕事を省みれば、子どものいじめ自殺問題などを断片的に扱ってきたにすぎず、そうした報道自体が連鎖反应的に自殺を誘発するといった批判もあって、何をなすべきか自問自答している浅学非才の身である。あらためてT君の笑顔を胸に刻み、自分にできることで汗をかきたい。